

「砂沼周辺地区事業 まちづくりワークショップ」開催

市では、中心市街地のにぎわいを造り出す「砂沼周辺地区都市再生整備計画事業」の一環として、市民協働のまちづくりを進めるため、「砂沼周辺地区事業まちづくりワークショップ」の第1回会議を11月24日、市立図書館で開催しました。

今回の会議では、市内の商工関係、まちづくり団体、高校生、市職員から選出された10代～80代の29人に委員を委嘱した後、本事業を進める上で下妻の魅力について再認識しようと、4班に分かれてワークショップを行いました。

ワークショップが初体験だったと話す下妻一高1年の寺門有紀委員からは「大人の委員さんから意見がどんどん出てくるので圧倒された。個人の意見を附箋に書き出して、みんなでまとめ上げる手法は、学校で物事を決める時にも使えと思った」と話が聞けました。

今後は、3月までに計4回の会議を通じて、砂沼周辺地区事業でまちづくりの新たな拠点として整備される砂沼エントランス(仮)と交流広場(仮)の効果促進案が検討されます。



ワークショップで熱心に討議する委員たち

家族内のルールで魅力的な農業を「下妻市家族経営協定調印式」

市役所会議室で11月26日、ネギや白菜などを栽培する人見一成さん、正恵さん夫妻(鎌庭)と、米や小麦を栽培する野部幸男さん、妻の百合子さん、母のアサ子さん一家(田町二丁目)の2家族が「下妻市家族経営協定調印式」に臨み、平成10年から始まった家族経営協定は延べ34家族となりました。

「家族経営協定」は、家族経営中心の農業が魅力的な職業として、男女を問わず意欲的に取り組めるよう、家族内で就業条件や休日の設定などのルールづくりをするものです。

以前は会社勤めをしていたと話す野部百合子さんは「自営業である農業者に、家族内での仕事を明確にする制度があることを知って驚いた。とても良い制度だ」と意欲を見せ、母のアサ子さんは「夫が大ききした農業基盤を息子夫婦が継いでくれてうれしい。家族協定を結んだことでより頑張りたい。私もできる限り協力したい」と調印を喜んでいました。



皆さん笑顔で調印されました(左前列から人見夫妻、野部家の皆さん)

誘致企業の工場建設進む 雇用創出や定住人口増に期待

■岡部株式会社が「茨城新工場新築工事起工式」開催



起工式にあたりNHKニュースの取材を受ける廣渡社長

耐震や免震用の建築資材を製造する業界最大手の岡部株式会社が12月17日、市内半谷のつくば下妻第二工業団地で、「茨城新工場新築工事起工式」を行いました。地鎮祭では、廣渡眞社長が鍬入の儀を行い、稲葉市長が玉串を捧げるなどして工事の安全を祈願しました。

新工場は、今年1月から第一期工事に着手し、平成28年1月の稼働開始を目指しています。総投資額約65億円をかけ、敷地面積約8.3ヘクタールに国内最大規模となる工場が建設される計画で、第一期工事の完成に伴い、現地採用や千葉工場から移る社員など約70人を雇用する予定です。

起工式のあいさつで、廣渡社長は「これだけ広い土地に、圏央道が完成すればインターチェンジから20分程度で来られる。いろいろな意味で好条件がそろった。

県や市の対応が迅速で、短期間で起工式に至ったことに大変感謝している。東日本を中心にやっていく工場となるが、将来的にはもっと拡充していきたい」と大きな展望を語りました。

■SMC株式会社が「下妻工場第2期建築工事地鎮祭」開催

自動車、電機、工作機械など多くの産業に欠かせない空気圧機器を製造するトップメーカーのSMC株式会社が12月22日、市内高道祖のしもつま桜塚工業団地で、「下妻工場第2期建築工事地鎮祭」を行いました。

同社の下妻工場は、敷地面積10.8ヘクタールに、第1期建築工事で床面積28,000平方メートルになる2棟の新工場を建築し、平成25年6月から操業を開始しています。今回の第2期建築工事は、現工場の約1.5倍となる床面積42,600平方メートルの新工場2棟を建設し、平成28年3月の稼働開始を目指しています。

地鎮祭後のあいさつで、佐竹正彦専務取締役・製造本部長は「今期の業績は順調に伸びている。下妻工場の操業開始から、わずか1年半で第2期工事に着手できることは誠に喜ばしいこと」と話し、稲葉市長は「地域経済の活性化や雇用の拡大にとどまらず、従業員の皆さまの移住や定住など、多方面にわたる波及効果に大きな期待を寄せている」と新工場建設を歓迎し、工事の安全を願いました。



鍬入の儀を行い、工事の安全を祈願する佐竹専務取締役(右)と稲葉市長(左)

独自技術で冷蔵した下妻の貯蔵梨 海外へ進出

下妻市の名産品・梨の輸出に取り組むJA常総ひかり、下妻市果樹組合連合会、茨城県西農林事務所、下妻市は12月2日、在東京タイ王国大使館を表敬訪問し、独自技術で冷蔵した下妻の貯蔵梨「豊水」を進呈しました。タイの年末年始の贈答や旧正月の供え物としての需要を見込んで、12月11日から行われる商談活動を前に表敬したものです。

約20年前から12月上旬に販売されている貯蔵梨は、冷蔵保存することで酸味が抜けて甘みが増し、お歳暮用に人気があります。



タナティップ・ウパティシン大使(右中)に貯蔵梨を紹介する梨生産関係者(12月2日、在東京タイ王国大使館で)

12月9日にはタイのプミポン国王への献上用に、さらに12月21日に来日したチュラポー女王への献上用に貯蔵梨を同大使館に贈りました。タイ王室への献上は、8月にタナティップ・ウパティシン大使が農業視察で本市を訪れた際、下妻の梨を気に入ったことがきっかけとなっています。

また、昨年6月に開所した茨城貿易情報センター(ジエトロ茨城)と連携して、11月に行ったマレーシアでの試験販売での好感触をもとに、今年2月の現地の旧正月に合わせて貯蔵梨の販売を開始する予定です。

JA常総ひかり下妻地区センター営農課の上野博樹課長は「タイ国王、王女に献上したことによるタイ国内での反響から、今後の贈答用貯蔵梨の取引増を期待したい」と話し、今後も農産物の販路拡大を目指した東南アジアへ輸出が進められます。

認知症を正しく理解する「下妻市高齢者家族介護支援事業講演会」開催



認知症の初期症状などを詳しく説明する杉野教授

市では11月22日、認知症の知識を普及啓発する「下妻市高齢者家族介護支援事業講演会」を千代川公民館ホールで開催し、市内外から約100人が参加しました。

講演会は、3人の講師が壇上に上がりました。古河赤十字病院の山中恵理氏からは、同病院内に設置された認知症疾患医療センター「もの忘れ外来」の実績報告があり、「認知症かどうかは早く確かめることが大事。心配なことがあれば早く当センターに相談を」と呼び掛けました。

「いろいろな認知症～認知症の進み方・認知症の検査と治療～」と題した、つくば国際大学の杉野一行教授の講演では、「アルツハイマー型」「レビー小体型」「脳血管性」の認知症の特徴や進み方が解説されたほか、最近では認知症の薬が開発され、症状を改善したり、進行を抑えたりすることができるようになってきた明るい情報が提供されました。

社団法人アロマ環境協会の岸直美氏からは、香りが脳を癒し、認知症に効果的で、予防効果があることなどの説明がありました。会場には、アロマテラピー効果のあるさわやかな香りが広がり、講演の間の休憩タイムには、アロマ効果が体験できるようハーブティが提供され、参加者はロビーで会話とハーブティを楽しむひとときを過ごしました。

若年性アルツハイマーに関心があって参加した40代の女性からは「40代でもかかってしまう病気で他人ごとではない。どのような症状が認知症になるかの判断が参考になった。親も心配になる年代なので、認知症をよく理解して対応していきたい」と話が聞けました。



休憩タイムにハーブティを楽しむ参加者

有料広告欄

有料広告欄